

## 令和6年度第1回清瀬市総合教育会議

令和6年度第1回清瀬市総合教育会議が、令和6年7月19日午前11時より開催された。出席委員、議事の概要は以下のとおりである。

- 1 日 時 令和6年7月19日（金）午前11時から正午まで
- 2 場 所 清瀬市役所本庁舎 庁議室
- 3 出席者 澁谷 桂司（清瀬市長）  
坂田 篤（清瀬市教育委員会教育長）  
宮川 保之（教育長職務代理者）  
尾崎 啓子（教育委員）  
鈴木 美紀（教育委員）  
中村 清人（教育委員）  
大竹 弘和（神奈川大学教授）
- 4 事務局 今村 広司（統括監経営政策部長）  
南澤 志公（教育部長）  
大島 伸二（教育部参事教育指導課長）  
大野 英武（教育企画課長）  
小林 真吾（未来創造課長）
- 5 議事日程 (1) 開会  
(2) 協議事項
  - ・「21世紀型の学校とは～コミュニティの中核としての学校はどうあるべきか～」
  - ・その他(3) 閉会

## (1) 開会

澁谷市長より開会の挨拶

## (2) 協議事項

(澁谷市長)

今回の協議事項は「21世紀型の学校とは～コミュニティの中核としての学校はどうあるべきか～」である。本日は、このテーマについて、意見交換やディスカッションをしていただきたいと思う。それでは、教育長より、今回の協議事項の趣旨の説明とお越しいただいている先生の紹介を行っていただきたい。

(坂田教育長)

新校建設の議論が進む中、市長より、本日の総合教育会議テーマとして、新しい学校の在り方についてご提案いただいた。教育委員会としても、定例会や全員協議会の場で、21世紀型の学校について話し合った。そのような中、市長から、大竹教授が著した「学校というハコモノが日本を救う」というご本をご紹介いただいた。

著書には、学校は子どもたちが一度下校すると自由に使えないハコモノであるが、放課後や土曜日日曜日に子どもから高齢者が集まれる場所に変われたとしたら、地域社会が大きく変わるというような内容が著されていた。他にも、学校に民間事業者を取り入れることができれば、様々なコンテンツやプログラムを安価に提供できるようになると思う。このような大竹教授の考え方の基、現代の学校施設活用の問題点、学校というハコモノの活用方法について議論していきたい。

また、現在本市で進めている新校建設においても、21世紀を象徴する取組みが進められており、令和6年3月には、新校建設に向けた基本構想及び基本計画を策定した。その計画において、新しい学校はコミュニティの中核として位置づけることが明記されている。

総合教育会議の前に開催した定例教育委員会会議の場で、大竹教授から「21世紀型の学校とは」をテーマにご講演いただいたが、この先の総合教育会議では、大竹教授のご講演を受けて、我々教育委員は何を学んだか、新校建設の在り方はどうあるべきと考えるかなど、大竹教授からご助言をいただきながら、市長と教育委員とで議論したい。

(澁谷市長)

教育長からお話があったとおり、清瀬市教育委員会としては地域総がかりで子どもたちを育てていくという大きな目標をもっている。先生のお話は、そうした地域の核としての学校、コミュニティスクールという考え方に沿うものだったと思う。

それでは委員の皆様から、先ほどの大竹先生のご講演を受けての今後の清瀬市の在り方や新校建設の在り方について、ご意見をいただきたい。

(尾崎委員)

学校をハコモノとして捉えるというのは現実的には難しいところも多いが、できないことではなく、できることを考える方向性でいきたい。

高齢者のための人生100年時代の生き方を考えていくということも踏まえて、子どもたちとの交流をどうするかというところに興味関心をもった。ハコモノとしての学校利用が、学び続ける社会をつくること、地域と子どもたちとの交流を深めるという観点で捉えていくと、様々な課題の解決に繋がるのではないかと思った。

1点質問させていただきたい。こういう話になると、学校の安全性について各地でもご質問が出ると思う。地域交流デパートメントの中での安全面の話で、学校教育専門棟というのは、学校関係者以外は使用不可だが、体育館や図書室等の使用は地域に開かれた状態で、地域の方と共有していくということなのか、お考えを知りたい。外部の方が入ってくることにに対する保護者の不安を払拭して、良いものだ打ち出していくためにはどういうことが必要かをお尋ねしたい。

(大竹教授)

安全面について、様々な人たちが検証していることだが、塀に閉ざされて、その中で安全性を保っていくと教員がガチガチになる。学校に善良、優良な市民が来ることによって、その方がさらに安全であると、研究者の間でも言われている。したがって、学校に健全な市民が出入りすることが、更なる安全性に繋がる。

また、例えば、音楽室にもう少し予算を投下して、ピアノを数台用意し、放課後子どもたちがピアノを習ったり、体育館は授業以外で空いていれば、様々なカリキュラムを入れたりするという考え方がある。音楽室は、授業以外でほとんど使わないというもったいなさがある。

(鈴木委員)

著書の題を聞いただけでは分からなかったことが、実際に講演を聴いてみて、驚きながらも理解することができた。

最も心配していたのは、尾崎委員もおっしゃった学校の安全性のところであるが、教育専用棟があるということで、教員と保護者双方にとって、安心できるご提案だと思った。

今までの講演の中で、完璧じゃなくても少しずつでもやっていけばいいというお話をされたということだが、清瀬市内でも、新校でなくても、既存の学校でも始められるのではないかと考えた。統廃合でなくても、こういう考え方のもとでスタートされた事例があれば教えてほしい。

(大竹教授)

事例はなかなか無いが、学校を新しく建てなくても、今ある施設の耐震工事などのときに、子どもたちだけが使える場所と動線を分けるような改修はできると思う。既存の学校でも、動線を分けることによって、今よりも人が訪れることができるようになる。

できれば芝生のグラウンドにすれば、就学前の子どもたちや高齢者が芝生で遊べる。子どもの遊び場がないという問題があるが、改修のときに工夫すれば、使えるところは増やせる。

現在は、少子化で余裕教室（空き教室）が増えているが、地域住民が使えるところと子どもたちが授業で使うところをうまく分けていけば、学校でパソコンを習えたり、英会話を習えたりすることができる。

(坂田教育長)

既存の施設を使って地域開放するというお話があったが、清瀬市立第六小学校が、トライアル的に年間数回図書館を開放している。図書館は1階にあるので開放しやすい。隣には家庭科室があるが、お茶を飲みながら読書を楽しむことができるという取組みを行っている。

清瀬市立第三小学校の図書室も外から直接入ることができるような造りになっているので、トライアル的に地域開放できないかということを経理校長先生に相談している。

(中村委員)

「学校というハコモノが日本を救う」という本を読んで、初めは題名に驚いた。私も幼稚園を運営しているので、幼稚園というハコモノをもっている。読書は苦手だが、読み始めると内容が充実していて面白く、一日で読破できた。

学校は地域の交流の中心となる必要があると思っている。子どもから大人が最大の利益を得られるようなサービスを提供できるような施設にしたい。それには民間の力が必要で、民間でしかできないこともあるのではないかと

思う。最初からできないとブレーキをかけるのではなく、まずは理想を掲げて議論することが大切だと思う。

先日、幼保小合同会議に参加ときに、小学1年生の接続についての話の中で、小学校の先生から、第1子と第2子では小学校への慣れ方が違い、第2子の方がスムーズであるという意見があった。校庭を開放すれば、小学校入学前から学校の環境に慣れておくことができるので、幼保小の接続という面でも良い影響がでるのではないかと思う。一方で、現在の校庭の状況を見ると、土のグラウンドであったり、遊具が少なかったりという問題もあるので、校庭の整備も必要だと思う。芝生以外で、校庭にどんな機能があったら良いか、教えていただきたい。

(坂田教育長)

芝生がオーソドックスかもしれないが、子どもたちと市民が両方使えるような健康遊具を設置するのが良いのではないかと思う。

(宮川委員)

学校の設計について、例えばトイレや教育相談室など、一方通行などで混雑にならないよう、利用する人の心理的なケアをするという発想で、学校の設計してほしい。

今年3月くらいに市ホームページにて、コンストラクションマネジメント作業が進んでいるとあったが、その委託業者にも大竹教授の講演を共有したいと思った。

また、私が今日大竹先生の講演を聴いて必然だと思っていることは、新たなコミュニティを作ることである。本市にも様々な国籍の人が住んでいるが、現状はコミュニティ・ガバナンスができていない。これから多文化共生の時代では、コミュニティ・ガバナンスが必然だと思う。将来、より様々な人種、国籍の人たちと共存することになったときに、対応できるように仕組みを作っておかなければ、私たちの先祖が作ってきた日本の素晴らしい文化や伝統が引き継がれない。私たちのアイデンティティーそのものが崩壊していく。そのような世の中を子どもたちに見せたくない。多文化共生社会を考えたときに、新しいコミュニティを作っていくことが大切だと思う。

また、大人の背中を見て子どもたちが育つのであれば、大人たちも学校にきて一緒に学ぶという文化を創らなければならない。そして、集まる人たちが様々な活動をして、ときには投資をして、ときには新しいルールを作っていく。それが、今日大竹教授の話にあった、学校と一般社会との間の歪を解消していくという新しい提案なのではないかと思った。

(大竹教授)

様々な自治体は定住化を目指しているが、最高の教育を施し、なおかつ大人も学べるようにすれば、定住化に繋がると思う。

「通勤の新幹線代を補助するからうちに来てください」というような方法ではなく、質の高い教育、地域で交流できる場があれば、住みたいと思ってもらえる。

神奈川テレビの方も講演を聴いてくれたが、一つの学校をモデルにして、子どもたちが変わっていく姿を5年間のドキュメントでやりたいという話があった。清瀬をモデルとして何かやってみて、テレビで放映すれば、自治体 PR ができ、宣伝効果があるのではないか。

また、保健室を活用し、子どもの保健の先生だけではなく、保健師さんを配置すれば、地域の高齢者の方も健康の相談ができるのではないか。

子どもから高齢者までの健康をサポートできるような場所にするというのも理想である。

他にも、全国に日本語を話すことができないまま学校に通っている外国人の子どもが4万人いるが、学校をハコモノとして活用して、外国人の子どもたちに放課後、民間のボランティアが日本語を丁寧に教えるという仕組みを作れば、日本語を話せない外国人を救えると思う。子どもだけでなく大人も来るかもしれない。これが、国際交流の促進にも繋がる。

(宮川委員)

今の話をきいて、是非そういう方向で行けたらいいのではないかと思う。地域の課題について、教育長を中心に教育委員会で洗い出していきたい。

最近話題になっている北海道の安平町立早来学園の設計は大竹教授の考えている設計と基本的に合致している。子どもが大人を見て学べるような空間を創りたい。この提案を進めていくことが清瀬のためにもなると思う。

(大竹教授)

教育バウチャー券という考え方がある。今、学校教育外で、教育格差が起こっている。学校外で教育を受けられない子どもたちへの補習を、放課後の学校を利用して行うのはどうか。

学校外の教育を受けられない子どもがいる低所得世帯や生活保護世帯に対し、自治体が教育バウチャー制度を利用して、パソコンや音楽を習えるような仕組みを作る。それで教育格差を解消できれば、日本のモデルになると思う。

(坂田教育長)

大竹教授と何度か話す中で、私が思い描いていたことを表現していただき、強く共感した。同時に、我々の責任を強く感じた。

学校関係者の意識を変えることは、文化を変えるに等しいと私は思っている。学校は、もちろん子どもたちの場所ではあるけれども、コミュニティのための場所でもあるということに気づいた。それを今度の新しい学校で具現化していくためには、学校関係者の意識を変えていかななくてはならない。

私も前の自治体にいたときに、藤原和博校長とお付き合いがあったが、学校は建替えず、既存の学校に民間塾を入れて補習授業を行うという非常に先進的な事例があった。この事例のように、様々なアイデアや工夫があれば、既存の校舎でもできることがあるのではないかと思う。

また、大竹教授がお示しになっている姿はひとつのゴールの姿。我々がそのゴールに至るまでに、どういうことをしていけばいいのか、最初から教育棟と市民活用棟を分けた学校にすることは財政的な面も含めて難しいと思うので、できる範囲で、何ができるのか考えていきたい。私の頭の中に、課題も数多くあるが、同時に夢と希望もある。子どもたちが学校で出会うのは、今までは先生だけだった。しかし、このコンセプトで学校を作ること、縦の関係だけではなくて、地域の方々と斜めの関係性を作ることができる。これは子どもたちにとっても重要なことであろうと思う。本市ではどこまで何ができるのかをもう一度しっかりと我々教育委員の中でも議論していきたい。

(澁谷市長)

コミュニティのための学校という話や文化を変えるという話があった。私もそうだが、市内の学校を卒業した市民の方は、常にマイスクールという考え方をもっている方が多い。多くの方は、卒業はしているが、今も自分の学校というイメージをもっているのだろうと私は思っている。そういう意味においても、コミュニティのための学校という話は、的を射ていると思う。地域の方にも、学校創りに大いに参画してもらいたい。参画したいと思っていらっしゃる方が多いのではないかと思う。

また、先生や委員の皆様の話を聴いて、学校の役割として、様々な切り口があるのではないかと感じた。一つは、市立学校としての機能、役割。もう一つは、地域総がかりでという意味で、地域のコミュニティの中核としての役割。さらにもう一つは、生涯学習の場としての役割。

学校施設として整備するという事なので、是非、多機能で多くの市民の方にご利用いただけて、市民の方に愛される学校にすることが一番の目標である。

(鈴木委員)

学校関係者の意識を変えなくてはならないという話があったが、同意する。それだけでなく、地域の皆さんの意識も変えていなければならない。今後は子どもたちの場所だけでなく、コミュニティの場所であるという意識をもたなければいけない。例えば、塀がなくなったときに、授業中は見守り、子どもたちの前に出ていかないというルールを作ることも含めて、清瀬市の文化を変えていかなければならないと思った。文化を変えていくことは、夢のあることだと思うし、未来のためになると思った。微力ながら、できることはやっていきたい。

(宮川委員)

何かやってみないと変わらない。今回の新校建設がチャンス。人間誰しも、知ること学ぶことは、楽しく心が豊かになることだと思う。学校は子ども時代だけ楽しむのではなく、大人になってからも楽しんでほしい。子どもたちが授業中に大人が入っていいかどうかという問題については、ルールを作って市民と共有する必要がある。学びの社会になるように進めながら、市民にも理解してもらう必要がある。

(鈴木委員)

今一步を踏み出さないといけない。ここで話しているだけではもったいない。広報の手段を以って、理想に向けて一步踏み出しているということを市民に共有したい。

(宮川委員)

学校と保護者、地域社会の分業と協業について、今度校長先生方と議論をする。学校の責任、親の責任と押し付け合うのではなく、分業協業の仕方を文字に落とし込んで市民にアピールしていく必要がある。こういうことが地域交流部門への一步だと思う。

(坂田教育長)

新校建設は、70～80億を費やすビッグイベントであり、大きな決断と覚悟が必要。80～100年先の社会にも対応できる学校づくりをしないといけない。大竹教授の学校づくりは、その一つである。繰り返しになるが、大竹教授の考える仕組みを我々のレベルでどこまで実現できるのか、何ができるのかをしっかりと議論したい。

また、鈴木議員がおっしゃったような意識改革を、市民の方々に向けて働きかけながら課題に取り組んでいきたい。

(大竹教授)

お金がかかるというところだが、様々な手法がある。学校教育施設として建てるのであれば、国から2分の1補助が出る可能性が十分ある。また、群馬県の太田市が、企業版ふるさと納税でアリーナを作った。P F S成果連動型、企業版ふるさと納税、ネーミングライツ等、様々な手法を組み合わせれば、お金を捻出できる。私は官民連携の専門で、お金の捻出についてはいくらでも議論できるので、費用の問題で諦めるのではなく、またご相談いただきたい。

(坂田教育長)

教育委員と校長との間で、家庭、学校、地域の役割の明確化、責任の履行について議論をスタートする。そして、その議論を教育委員会として市全体に発信していきたい。学校の働き方改革の問題もだが、3者の役割分担は必須。私どもの考えを地域全体に広げていきたい。

(3) 閉会

澁谷市長より閉会の挨拶

以上